ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.14 No.5 May 2013

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

5

CONTENTS

- 巻頭言
  巨木と雑草
  ／深谷忠一 1
- 天理教伝道史の諸相（17）
  大分と福岡の天理教
  ／早田一郎 2
- 「おふでさき」の有機的展開（13）
  第三号：第十五首～第十八首
  ／深谷耕治 3
- フランスで育つ日本人の子供たちへの日本語教育（5）
  天理日仏文化協会こども日本語講座の取り組み⑤
  ／田中久代 4
- 新宗教のブラジル伝道（1）
  ブラジルの宗教風土①
  ／山田政信 5
- 「いのち」をつなぐ―生死の現象（17）
  死をどのように考えてきたのか⑧
  ／堀内みどり 6
- ノーマライゼーションへの道程（15）
  福祉のまちづくり②
  ／八木三郎 7
- 天理参考館所蔵の漢族資料（5）
  玩具②
  ／中尾徳仁 8
- 図書紹介（74）
  『希望の倫理　自律とつながりを求めて』
  ／金子珠理 9
- English Summary 10
- おやさと研究所ニュース 11

「教学と現代９」（海外伝道特別講座）報告：第３回／新連載執筆のねらいと執筆者紹介／第３回「宗教と環境」研究会を開催／平成25年度公開教学講座開催のご案内

巻頭言

巨木と雑草

おやさと研究所長　深谷忠一　*Chuichi Fukaya*

現在世界一の長寿の木は、米国・加州・インヨー国立森林公園の樹齢4800年の“Bristlecone Pine”（イガゴヨウマツ）です。また、世界一高い木は、同州レッドウッド国立公園のセコイアで、樹高が115.6mあります。また、体積が世界一の樹木は、同じ加州のセコイア国立公園内の“General Sherman”と名付けられた幹だけで1,489㎥（50mプール約１杯分の水と同じ体積）あるジャイアントセコイアです。そして、一番太いといわれる木は、メキシコ・オアハカ州にあるメキシコラクショウで、地上1.3mでの幹周が45mあります。

これに比して動物では、最大でシロナガスクジラの30数m、寿命では、リクガメの188年が最長寿の記録（ドイツ・マックスプランク研究所）だとされていますから、“より長く生き・より大きくなる”ことでいえば、（特殊な菌糸体を除けば）杉や松の巨木が、この世で一番成功している生物だといえます。

しかるに、一方、植物学の世界では、植物は巨大な「木」から小さな「草」へと進化したといわれます。１年で花を咲かせて実と種を残す小さな雑草の方が、杉や松の巨木より進化した植物だというのです。その理由は？植物が種としてより多くの子孫を残すためには、大人になるまでの時間が短いほど不測の事故に出会うリスクが少ないからです。つまり、種子を残さずに命を終えると次の世代に繋がらないので、一本の草木・個体としての寿命や大きさに拘るよりも、小さいサイズのままで代替わりのサイクルを早くした方がよい。その方が環境の変化などにも対応しやすくて、種としての繁栄を目指すためには有利だというのです。

つまり、前述のような巨木は、一本の木・個体としては立派なものですが、その種全体の繁殖範囲と個体数という視点からは、世界のどこにでも無数に生えている雑草の方が、人里離れた場所に数えるほどしか見つからない巨木より勝っているということです。

さて、この植物での様相と同じようなことが、人間の社会にも見られます。たとえば、国の単位でいえば、国力が強くなり国民の寿命が伸びた国では、少子化が進んで人口の減少化に向っています。反対に、経済の力が小さくて平均寿命が短い国ほど、人口が増加して若年層も増えているのです。もちろん、人間の生きる目的は子孫を多く残すことだけではありません。また、人口増加だけで民族・国家の繁栄が約束されるわけでもありません。そして、国の人口構成を一気に変更することも難しいことです。しかし、その中でも、国中を大木の森にしようとするのか、あるいは、草花の広い野原を作ることを目指すのか、民族・国家の活力を高めるためにはどちらにより力を入れるべきかを、考えておく必要があると思えるのです。

また、国家より小さい組織・グループの中でも、たとえば、“一将功成りて万骨枯る”という言葉があるように、突出した人物が長期間君臨し続けると、かえって他の人材の成長を妨げたりします。ジャイアントセコイアのような偉人の周辺では、日の当りが悪くて枯れる人材も出がちなのです。ですから、すでに聳え立っているカリスマよりも、これから芽をだすべき若者の方に光があたるように考慮するのは、組織繁栄のためには大切なことだといえるのです。

さらに申せば、現在の日本では、健康・長寿が国民の最大関心事になっています。すでに世界でも指折りの長寿社会を達成したにも関わらず、さらに莫大な時間とお金が健康・長寿のために使われようとしています。環境・医療・衛生・食品・運動その他諸々の事が、“健康・長寿”の錦の御旗のもとに結集して、“健康のためには死に物狂いで頑張る”などというジョークが真顔で語られる状況です。

…さて、かく記してきますと、“天理教教祖も「115歳定命」と言っている”という指摘がなされそうですが、しかし、それは“世界中の心が澄み切った暁でのこと”であって、115歳に到達するのが人生の目的そのものではないのです。だからこそ、教祖のひながたも90歳で終えられているのだと思うのです。

長寿は長年の風雪に耐えた結果ではあっても、ただそれだけで値打ちがあるのかどうか。皆がひたすら“100歳・現役バリバリ”を目指しているかのような世の流れの中で、そのことを今、ちょっと考える必要があるのではないかと思う次第です。